

万葉集校本データベースから古字書データベースへ
From Manyoshu variorum database
to the old dictionary database

西端 幸雄

Yukio Nishihata

大阪樟蔭女子大学 学芸学部, 東大阪市菱屋西 4-2-26

Osakashoin Women's University, 4-2-26, Hishiyaniishi, Higashiosaka-shi, Osaka

鈴木 榮一

Eiichi Suzuki

万葉情報システム調査会

Investigation Committee for information system about "Manyoshu"

あらまし:万葉集の主立った古写本・版本の画像データを対比できる「万葉集校本データベース」の紹介と、現在構想中の古字書データベースの紹介、さらに、将来、それぞれをどのように関連付けていくかを説明する。

Summary: We introduce "Manyoshu variorum database" which can compare image data of main copied books of old time and printed books of Manyoshu now introduce the old dictionary database elaborating a plan again and explain how We connect those databases in the future.

キーワード:万葉集, 校本, データベース, 古字書

Keywords: Manyoshu, variorum, database, old dictionary

1. はじめに

国文学の諸領域の中で、上代文学の分野は、これまで電子メディアに最も縁が薄かった。

そのため、1997年に、有志が集まり、「万葉情報システム調査会」を結成した。この会の結成の趣旨は、上代文学の分野における先学の諸研究から最新の研究成果までをデータベース化し、それらを幅広く効率的に検索するシステムの実現を目指すというところにある。

その構想したところについては、すでに、シンポジウム「人文科学における数量的分析 IV」及び「第11回文献情報のデータベースとその応用に関する研究会」(1999.3:総合研究大学院大学)と「第14回西日本国語国文学データベース研究会

(DB-West)」(1999.6:大阪樟蔭女子大学)において発表した。

そして、その構想の一端は、本「万葉集校本データベース」の公開と『CD-ROM版萬葉集』(2002:塙書房)『萬葉集索引』(2003:塙書房)の刊行という形で実現させたのであるが、さらに、文字データをはじめ画像データなどをも含めたデータベース構築等といった複数のアイデアの実現化へと向かっている。その一つの活動が、本稿第5項以下で紹介している「古字書データベース」である。

また、将来的には、これらのデータベースをより充実させ、さらに公開することにより、様々な研究目的への用途が見込まれ、上代文学の研究が飛躍的に発展するだろうと確信している。

2. 万葉集研究の現状

ところで、古代日本の文化と日本人の精神生活を窺うことのできる古典として、また、当時の事物や社会の様相を研究するために欠かすことのできない第一級資料として、古来、その重要性が広く江湖に認められている『万葉集』は、原本が現存しないため、その原文復元は大変困難な作業であるといえよう。

古典の基本的研究は本文の吟味にはじまり、その本文の吟味は諸本の対校によるといわれる。この対校作業は古典研究の基礎であるが、古写本・版本の形でしか残っていない『万葉集』においては殊にそれが重要である。

そして、その目的を実現すべく、かつて、1912年文部省文芸委員会において、国家の事業として『万葉集』諸本の対校と定本編纂をする事となり、1924年には『校本萬葉集』（現在、新增補版『校本萬葉集』（岩波書店）全21巻が刊行されている）が刊行された。さらに、また、我が国の古典研究における単語索引の先駆けとして、『万葉集』に使用された単語の全てが検索できる『萬葉集總索引』（正宗敦夫）が1929～31年に刊行されたのである。

しかしながら、現在の古典研究はこれらの事業の上に立ってさらに深化してきており、本文研究においても詳細を究め、『校本萬葉集』だけでは十分とはいえ、また『校本萬葉集』自体、非常に見にくく（図1参照）、また、誤りが散見でき、各種古写本・版本を直接見て対校すべき必要が生まれている。とはいえ、現実的には、『万葉集』の主立った伝本だけでも、30点を優に超えており、それぞれを刊行された書籍の上で相互に対校するといった作業は煩雑を極め、多大な時間と労力を要し、容易ではない作業となる。

3. 万葉集校本データベースの紹介

そこで、「万葉集校本データベース」では、使用の許可が得られた諸伝本について、そのすべてを画像データとして取り込み、1首単位に切り出し、同一歌番号の同一句の画像データを並列させ、画像を左右に移動させることにより、各伝本間の異同の有無を容易に対校できるようにした。

このデータベースの完成により、検索したい歌番号を入力すると、瞬時に諸伝本の画像データに直接あたって対校でき、これまで書籍の上で行っていた対校作業に比べ、簡便に、また、より一層

精緻な本文校訂・付訓が可能となり、古写本が伝写されてきた過程において発生したであろう誤写・誤脱・誤読の特徴が明らかになり、本文校訂・付訓の作業を能率的に、かつ正確に行うことができるようになるものと確信している。また、これまで誤りとされていた本文や付訓を訂正することが可能となり、さらに、難訓歌とされている歌の理解も進めることができる。

この「万葉集校本データベース」のデータ構成は、以下の通りである。

I 画像データベース 本データベースの根幹を成すデータであるが、寛永版本（使用許可済）の画像データを基軸とし、歌単位（異伝含め約6000首）で切り出し、句毎に整理し、他の古写本画像データ（『万葉集』の古写本『桂本』、『藍紙本』、『元暦校本』、『広瀬本』、『西本願寺』、『京都大学本』等、約12種類）と、句毎にそれぞれの画像を並列させたものである（図2参照）。

II 翻刻本文データベース 鎌倉時代の仙覚に始まって、室町・江戸時代を経て今日に至るまでの『万葉集』の注釈書における歌本文の翻字データである。手写された『万葉集』の古写本を、注釈を行った人々がどのように読解していたかを知るための重要なデータである。ここで、採用している注釈書は、古注釈としては、『萬葉集註釈』『萬葉代匠記』『萬葉集童蒙抄』『萬葉考』『萬葉集略解』『萬葉集櫛の杣』『萬葉集攷証』『萬葉集古義』をはじめ約20種類の注釈書、また、明治以降の注釈書としては、『万葉集註疏』（近藤芳樹：1868頃）に始まり、現代の『万葉集釈注』（伊藤博）に至る約20種類の注釈書を取り上げている。

III 訓み本文データベース IIの翻刻本文データと対をなすデータで、『万葉集』の注釈書において、万葉仮名、または漢文形式で書かれたりしている歌本文を、和語として訓んだ結果をテキストデータ化したものである。という点で、これも、注釈を行った人々がどのように読解していたかを知るための重要なデータである。

IV 注釈データベース 仙覚以降の主立った注釈書に掲載されている各歌毎の注釈データを一覧できるものである。

V 口訳データベース IVの注釈データベースと

対をなすデータで、各注釈書において、IVの注釈に基づいて各歌の意味をどのように解釈しているかが一覽できるデータである。口訳データとしては、当然のことではあるが、明治以降の、『万葉集註疏』(近藤芳樹:1868頃)に始まり、現代の『万葉集釈注』(伊藤博)に至る注釈書を網羅している。

本データベースは、1999年度から、「寛永版本」の歌単位画像データ、各種古写本の歌単位画像データ、各種注釈書の歌単位テキストデータの入力作業を行い、基本歌テキストデータとリレーションさせ、2003年度に完成させ、万葉情報システム調査会が運営管理しているホームページ (http://www.manyou.gr.jp/SMAN_1/) でデータを公開している。

また、近い将来、DVD-ROM版でのデータ提供も予定している。

4. 万葉集校本データベースの利用

次に、その「万葉集校本データベース」の利用の一端を紹介する。

既に述べたように、奈良時代に成立した『万葉集』の原本は失われているが、平安中期以降の古写本・版本が多数残っている。ところが、長い間伝写が繰り返されてきたため、それらの中には、本文の乱れ(誤写・誤解)が散見される。そのため、中には、今日でも訓みが確定しない歌もあるほどである。

今、提示するのは、大和三山が妻争いをしたという伝説を背景として歌われた有名な歌である。

その末句において、古写本・版本間での本文の乱れが激しいのであるが、その点を、本「万葉集校本データベース」を利用して、各古写本・版本間の句データを比較すれば、歌本文の校訂が行えるという点を述べておく。

かぐやまは うねびををしと みみなしと あひあらそひき
 高山波 雲根火雄男志等 耳梨與 相諍競伎
 かみよりり かくにあるらし いにしへも しかにあれこそ
 神代従 如此尔有良之 古昔母 然尔有許曾
 うつせみも つまを あらそふらしき
 虚蟬毛 嬌乎 相格良思吉(13)

その異同の状態を、まず、『校本萬葉集』によって示すと、図1のようになるのだが、異同の状態の状態を知る手掛かりにはなるが、略号が使われていたりして、各古写本・版本間の比較を行う場合には、かなり使い慣れないと分かりにくい面

がある。

一方、本「万葉集校本データベース」で、当該句の異同を調べると、図2のように表示され、各古写本・版本を直接に見ながら比較ができる点で、正確な対校作業ができる。

ところで、今、問題として取り上げる末句を翻字すると、以下のようになる。

[寛永版本]	アヒウツラシキ 相格良思吉
[元暦校本]	左傍訓「アラ」 アヒテカクラオモヒキ 相格良思吉
[広瀬本]	アラソフラシキ 相格良思吉
[紀州本]	アヒウテラントラモキヤ 相格良思吉
	右傍訓「アヒテカタ」「オモヒ」を消す。左傍訓「アヒテウチ??オモヒキ」を消す。
[神宮文庫本]	アヒウツラシキ 相格良思吉
[西本願寺本]	左傍訓「アヒウチヨシト」 アヒウツラシキ 相格良思吉
[京都大学本]	左傍訓「アヒテカクラオモヒキ」 アヒウツラシキ 相格良思吉
[陽明本]	左傍訓「ミルニテカクオモヒ」 アイラキ 相格良思吉
	左傍訓「ミルニテカクオモヒ」

以上のように、各古写本とも、本文の表記と訓みが一定していない。

まず、本文の表記としては、2文字目の用字について、寛永版本と神宮文庫本が「格」字としているのに対して、その他の古写本は「格」としているという揺れがあるが、『説文通訓定聲』に「格、段借為格」とあり、両字は、相通する。その点で、当該箇所表記は、「格」でも「格」でもよいということになるが、平安期の成った元暦校本や類聚古集が「格」字を用いている点で、元もと「格」字であったとしてよいと思われる。

また、この句の訓みであるが、単純に二分するなら「相格」の箇所を「あひうつ」と訓むか「あらそふ」と訓むかの問題となるのだが、『説文解字』に「格、撃也」とあり、『広韻』に「格、闘

也」とある。ということは、可能性として、「うつも」も「あらしふ」も成り立つということになる。その点で、漢字の表す意味から訓みが確定できないことになる。そこで、この13番歌全体の解釈を行ってみると、「香具山は畝傍山を取られるのが惜しいと、耳梨山と争いあった。神代から、このようであるらしい。昔もそうだったからこそ、今の世の人も、妻を……」(新日本古典文学大系による)ということになる。つまり、「昔もそのようであった(いにしへもしかにあれこそ)」だから、「今の世の人も(うつせみも)」そうであるということになると、4句目の「相諍競伎(あひあらしひき)」を受けた句が、当該の末句であるということになる。以上の点からして、この末句の訓みは、「あらしふらしき」とする方がよいということになる。

以上に説明したように、本「万葉集校本データベース」そのものが、本文の校訂の答えを提供はしてくれないが、まず、問題点の発掘と、その問題解決の糸口を提供してくれるものであると位置づけられよう。

5. 古字書データベース

以上に紹介してきた「万葉集校本データベース」と関連するデータとして、我々が最もその必要性を感じていたのが、我が国の平安時代から鎌倉時代初期に編纂された古字書データベースである。

その必要性の背景には、万葉集の時代、人々が漢字理解を行う場合、中国から渡来した字書を元にしてきたということがある。ただ、その当時の日本に渡来していただろう中国字書は、『切韻』にしる『玉篇』にしる、完本の形では現存していない。そのため、それら中国字書を抄録したり、抜粋して利用している我が国の古字書を見る必要がある。

しかし、今日、我が国の古字書の整備は、本文の影印や漢字・和訓索引が刊行されているという点では、進んでいるとも言える。しかし、特に古字書というものは、過去の字書や文献を引用することによって編集されたり、増補されてきた。その点では、複数の古字書を縦断的に、また、網羅的に見る必要があるのだが、そうした機能を備えた資料は、『古字書総合索引』(長島豊太郎編:1957)が唯一である。その内容は、8種類の彼我の古字

書の見出し漢字索引である点では、上記の条件を備えていると言える。ただ、本書における見出し漢字の表記が手書きである点で、漢字についての相当な知識を有するものしか使えないという問題と、すでに絶版になっていて、入手が困難であるという問題を抱えている。

また、古字書も、他の古文献と同様、原本は存在せず、写本・版本の形でしか伝わっていない。そうすると、それらが伝写されてきた過程において発生したであろう誤写・誤脱・誤読も当然残存している。ところが、現在のところ、それらの誤りは部分的に指摘されてはいるが、統括的な指摘はまだ成されていないのが現状である。そうした場合、先に紹介した「万葉集校本データベース」と同様に、各古字書の同一見出し漢字の本文を並列的に並べることで、相互比較が容易にできるのではないかと、さらに、多くの古字書を網羅的に見ることによって、『万葉集』をはじめとする上代文献の読解が進むのではないかとこのところから、本「古字書データベース」作成を計画したわけである。

この計画では、『新撰字鏡』『篆隸万象名義』『類聚名義抄』『和名類聚抄』等のデータベース化を図る予定である。

6. 『新撰字鏡』のデータベース化

そこでまず、初年度には、平安時代の寛平4年(892)に草案本三巻が成り、昌泰年中(898～901)に十二巻に増補された『新撰字鏡』をデータベース化することにした。

この『新撰字鏡』を選択した理由は、まず、我が国の漢和辞書としては、現存最古のものであるという点と、その成立が、中国の『一切経音義』『切韻』『玉篇』の三本に、すでに現存しない我が国の古字書等を併せて編集したものであるという点と、さらに、後世の『世尊寺本字鏡』『天理図書館蔵観智院本類聚名義抄』に影響を与えているという点で、最初にデータベース化する意義のある資料であると判断したからである。

現存する『新撰字鏡』は、天治元年(1124)に法隆寺一切経の一部として書写された十二巻本系の天治本と、享和3年(1803)の序を有し、十二巻本系から和訓の注を有する項目だけを抜き出した享和本、享和本の校異に用いられた抄録本の群書類

従本の、三種類があるが、そのうちデータベース化するの、『天治本新撰字鏡』である。

この『天治本新撰字鏡』は、所収見出し漢字数、約 21,300 字で、そのうちに、約 3,000 の和訓が存する。字書としての体裁は、基本的には部首分類体をとっているが、それぞれの漢字は、今日の漢和辞典のように、画数順に並べるなどといったように、整然と整理はされていない。

その和訓を検索するための索引は、『新撰字鏡 国語索引』（京都大学文学部国語国文学研究室：1958）があるが、見出し漢字を検索するための索引としては、前述の『古字書総合索引』があるだけで、『新撰字鏡』を漢字辞書として利用しづらいのが現状である。

そこで、『天治本新撰字鏡』として刊行されているうち、本文の状態がよい、大槻文彦によって編纂され、1916 年に六合館から出版されたものを使用して、全巻をスキヤニングし、さらに、見出し漢字と注文を切り出し、画像データベース化している。

現在、この『天治本新撰字鏡』データベースをテストデータとして、検索方法の検討、および、画像の表示方法などの検討を行っているが、特に、漢字の検索方法については、J I S 外字が多いため、多角的な検索を可能とするように努めている。

その漢字検索方法のパターンは、以下の通りである。

- ①大漢和番号検索
- ②自由入力検索(J I S 内字のみ)
- ③複合検索(1つ以上の条件で検索可能)
 - ・ 部首
 - ・ 漢字音
 - ・ 画数

①の大漢和番号検索は、『諸橋大漢和辞典』（大修館書店）に付されている通し番号を入力して、当該漢字を検索する方法である。②の自由入力検索とは、パソコンが通常扱える漢字（J I S に登録されている漢字）を入力して、検索する方法である。また、③の複合検索とは、検索したい漢字の部首か漢字音か総画数が分かっている場合、それらのうち、1つ以上を条件として検索する方法である。

これらの内、どれかの方法で検索し、該当する漢字がない場合には、「漢字が存在しません」と表示し、該当する漢字が存在した場合には、それらの漢字すべてを表示できるようにしている。（『新撰字鏡』においては、同一漢字が複数回、見出し漢字になっているケースは少ない）

今は、図 3 に、③の複合検索を行った例を挙げておく。

部首として「日」、漢字音として「ケイ」、画数として「8」を与えて、[検索する]をクリックすると、図 4 の検索結果画面に切り替わる。

現在は、『天治本新撰字鏡』のデータしか取り込んでいないが、将来は、『篆隸万象名義』『類聚名義抄』『和名類聚抄』等のデータベース化も計画しているので、図 4 に表示されている画像の横に並列して、他の古字書のデータも並ぶことになる。

7. 古字書データベースの利用

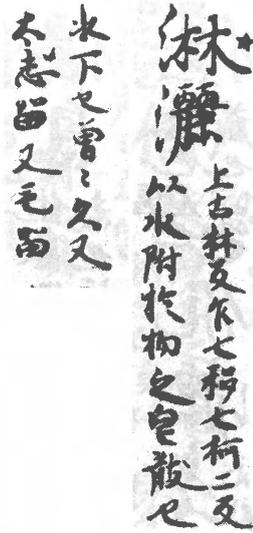
ここでは、現在計画している「古字書データベース」にどのような利用価値があるのか、その一端を紹介することとする。ただ、「古字書データベース」は、今のところ、前項で説明した『天治本新撰字鏡』しかデータベース化していないため、今は、その『天治本新撰字鏡』が『万葉集』の訓みと意味解釈に重要な働きをするという点を紹介するにとどめる。

石灑 岸の浦廻に 寄する波 辺に来寄らばか
言の繁けむ(1388)

この歌の初句に用いられている「灑」字は、『万葉集』中、孤例である。その点で、この文字の訓みと意味は、『万葉集』だけを見ても確定できないのである。

そこで、古字書にこの文字を求めると、『天治本新撰字鏡』に「淋灑」という見出しで掲載されている（下に掲げた例参照）。それによると、注文に記載の和訓「曾々久」から訓みは、ソソクであることが分かり、さらに、意味は、義注「散也」「水下也」からして、水などが飛散するように激しく流れ下る様を表すことが分かる。よって、当該の初句の訓みは、「いはそそく」となり、上の歌の初句から 3 句までの解釈は、「岩を激しく洗

うように 岸の浦辺に 寄せてくる波のように」
となる。



加えて、上記の、我が国において成立した古字書群のデータベース化と平行して、それらの古字書に多大な影響を与えた、中国の古字書についても、データベース化を図りたく考えている。

それに、奈良時代から平安時代にかけての国語・国文学系の総合データベースを目指す端緒として、先に紹介した「万葉集校本データベース」とこの「古字書データベース」とをリンクさせることにより、「万葉集校本データベース」の各画像内の文字をクリックすれば、「古字書データベース」内の画像データを表示できるようにする予定である。これによって、『万葉集』の表記文字の訓みの検討がより一層簡便に、また、厳密に行えるようになるものと確信している。

8. 古字書データベースの将来

前述のように、現在は、『天治本新撰字鏡』しかデータベース化していないが、将来は、『篆隸万象名義』『類聚名義抄』『和名類聚抄』等のデータベース化を計画している。

このように複数の古字書をデータベース化する理由は、既に触れたことではあるが、古字書が過去の字書や文献を引用することによって編集されたり、増補されてきたものであることから、まず、それら過去の字書や文献をどのように利用しているのかという字書生成の過程を知ることができるという点がある。

また、古字書が伝写される過程で、誤写・誤読といった誤りが発生していることが多々あるのだが、近い関係にある古字書相互を比較することによって、その誤りを正すことも可能となる。

さらに、古字書に引用されている過去の字書や文献の中には、部分的に残っていたり、現存しないものもあるのだが、そうした、佚文を収集することによって、現存しない資料の復元が可能にもなる。

このような利用方法を考えると、それぞれの古字書を書籍の形で並べて比較するより、本「古字書データベース」が構想している同一見出し漢字の本文を同一画面上に並列的に並べるということの方が、きわめて有用性が高いと言えるのだろう。

図 1

毛織子相格良思吉

〔因〕三浦神城 三浦相格良思吉ノ右ニ基キテナリ。三浦古
 城元今文仲風氣也。

〔因〕三ツマタアヒウツラレ申北漢字ノ右ニ基キテナリ。三ツマ
 ヲシレラモヒキアリ但上ノハ明ナラズソノ右ニ基キテナ
 りアヒチカクモヒキアリ但上ノハ明ナラズソノ右ニ基キテナ
 トメニアヒチカクモヒキアリ但上ノハ明ナラズソノ右ニ基キテナ
 ヒキイモアヒウツラレ申北漢字ノ右ニ基キテナリ。三ツマ
 グラオモヒキアリ但上ノハ明ナラズソノ右ニ基キテナ
 イハ基キテナリ。三ツマアヒウツラレ申北漢字ノ右ニ基キテナ
 アヒウツラレ申北漢字ノ右ニ基キテナリ。三ツマアヒウツラレ申
 ニアヒチカクモヒキアリ但上ノハ明ナラズソノ右ニ基キテナ
 ノ三字ナリ。三ツマアヒウツラレ申北漢字ノ右ニ基キテナ
 柳子ノ左ニ基キテナリ。三ツマアヒウツラレ申北漢字ノ右ニ基
 モヒキアリ但上ノハ明ナラズソノ右ニ基キテナリ。三ツマ
 オノ右ニ基キテナリ。

〔因〕三ツマアヒウツラレ申北漢字ノ右ニ基キテナリ。三ツマ
 良思吉アヒウツラレ申北漢字ノ右ニ基キテナリ。三ツマ
 柳子ノ左ニ基キテナリ。三ツマアヒウツラレ申北漢字ノ右ニ基
 傾トモニカラレキアヒウツラレ申北漢字ノ右ニ基キテナリ。

図 2

万葉集校本データベース

万葉集校本データベース作成委員会

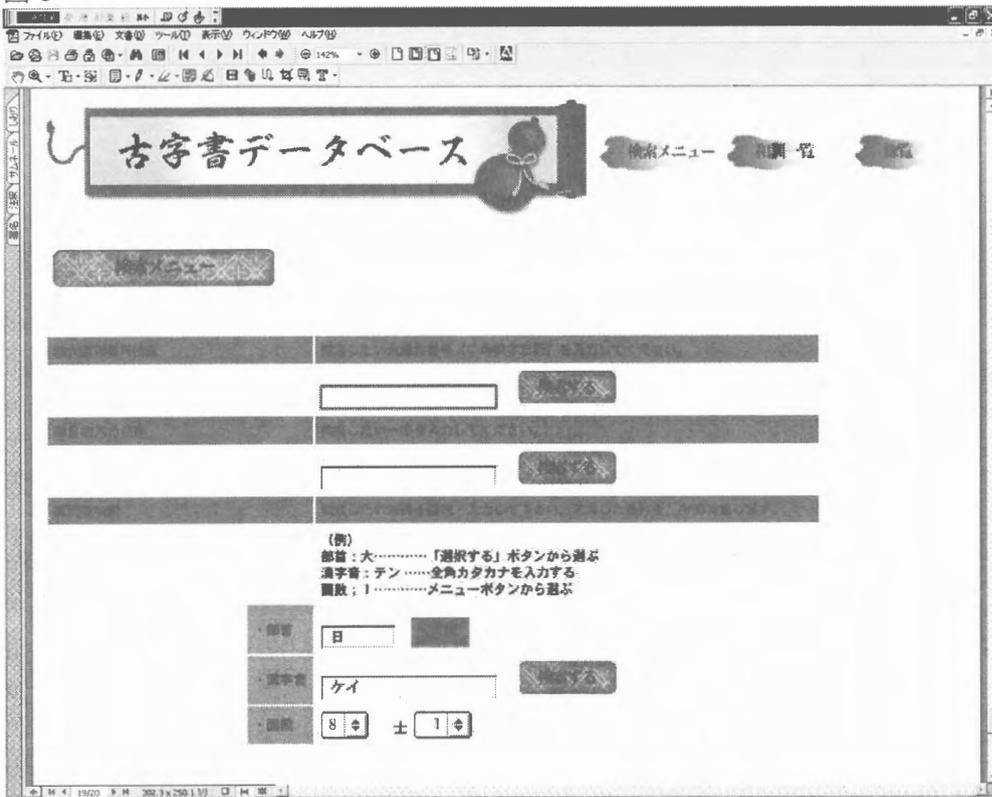
●各古写本歌句表示画面
 データ作成中につき、全てのデータが表示されるわけではありません。

寛永版本	元暦校本	広瀬本	類聚古集	紀州本	神宮文庫本	西本願寺	京都大学本	陽明本
アヒウツラレキ 相格良思吉								

ページが表示されました

インターネット

3



4

